

研究通信

第61号

1968・5刊

村落社会研究局
会 事 務 局

東京教育大学
文 学 部
社会学研究室内

運営・編集合同委員会記事

昭和四三年度、村研第二回運営委員会および第三回編集委員会は、四三年四月一七日（水）午後六時より東京教育大学社会学研究室において合同で開かれた。出席者、小池基之、福武直、中野卓、蓮見音彦、安原茂、米地実、北原龍二、柿崎京一の各委員。

◎ 運営委員会に関する議題

一 会計の現状報告 昭和四三年一〇月二〇日愛知大学より会計事務の引継ぎ以降、現在（四三年四月一七日）までの中間報告が北原委員よりなされた。（関係記事は会計報告欄にもある。）なお、その際に、(1)村研会計年度である一〇月一日より翌年九月三日の期日を厳守し、大会時の会計は特別会計として別途に会計を行うこと。(2)会費納入額のなかには次年度以降の分も加算されているが、この金額は当該年度に繰越す分として分離しておくことが望ましい、という意見が確認された。

二 本年度大会について

○大会期日及び場所 本年度の大会は十月二三日(火)、二四日(水)の両日に決定した（なお、日本社会学会は十月二一、二二日の両日、

◎ 今秋村研大会の共通課題

「村落構造の変化に対する推進力」の報告者を募集します

一 応募の切は、五月末日、応募先は、東京都文京区大塚三丁目、東京教育大学文学部社会学研究室気付、村研事務局、応募の際は、仮題及び一・二行でもよいから報告内容の説明を添えて下さるようお願いいたします。

◎ 研究会開催案内

一日時 五月一八日 出 午後四時から
一 場所 本郷学士会館七号室
一 報告者・テーマ 蓮見音彦氏 「構造政策と村落の変動」

◎ 編集委員会開催通知

一日時 五月一八日 出 午前一〇時半から一二時
一 場所 瑞書房

◎ 運営委員会開催通知

前記研究会終了後、ひきつづき運営委員会を開きますので運営委員の方はお残り下さい。会場は研究会終了時までにくめまます。

早稲田大学に於て行う予定)。場所は、館山国民宿舍、箱根や逗子の共済組合保養所などが候補地としてあがったが、東京からの交通の便利、時間等を考慮した結果、逗子保養所を第一候補地とするこゝとした。なおその後、椅子式の会議室をもつ鎌倉保養所(若宮荘)はどうかという案もでている。

○大会報告の構成今年度は試みに、自由課題の報告を休止し共通課題に沿った報告のみとしてはどうかと今回の運営委は企画している。このような企画が出てきたのは、第二日目を、九一日共同討議にあて十分な論議の時間がとれるように、第一日に共通課題報告を行ってもらうこととしてはという考えからである。二日目の討議には、人により予め討議資料を準備しての発言をも期待できることとなる。共通課題の報告者は四〜五名とする。この運営委の企画について会員諸兄より御意見をまつ。

○共通課題について昨年度の課題「村落構造の変化に対する推進力」を本年度も継続するよう、昨年の総会時に提案されていたとおり、運営委員会では昨年来の共通課題に、特に限定や補足を加えず本年も継続することに決定した。ただ、この共通課題に関する二日目の共同討議をどのような論点を考慮に入れてすすめるべきかにつき今後多様な御意見を全会員から頂き、大会直前号まで、村研通信の紙上を活用して討議を重ねてゆくことにした。研究会も活用して、先の、一月の研究会を第一回とし、第二回(五月)、第三回

(六月)を東京で聞き(第一面参照)その結果は、第一回の場合と同様、村研通信に掲載し、反響を求め、各地での同様な予備的検討

の進行を期待する。

共通課題の報告を希望される方は、前記の討論の進行を参考にはしても、それに拘束されることなく、既に確定した課題名のもとでこれにふさわしいと判断された御自分の理論的枠組にもとずき独自にその報告を準備されたい。報告の申込みについては別掲の公募記事を参照のこと。

◎編集委員会に関する議題

一 年報第四集の編集について 予定された論文は研究動向(原稿〆切四月末日)の原稿を除き全部出揃ったので、編集委の当初の方針にもとずいて、内容の検討を行い、掲載論文、順序などの方針を逐次審議する。次回の編集委員会を四月二七日と定めて散会した(後出記事参照)

二 村落社会調査研究叢書についての報告

研究叢書につきましては、編集委員会において、次のように取扱うことにしました。

現在のところ、四名の方々から申込がありますが、これらの方々完成原稿を送っていただき、先着順に然るべき審査をして、逐次刊行するということになりました。

これまでの出版社とのとりきめでは、三冊までは基金五〇万円で出版してもらえらるわけで、すでに一冊分超過することになります。本が売れて何とかとんにゆけば、これ以上の刊行もしてもらえますし、そうならなくても叢書刊行はつづけてゆきたいわけですので、今後とも会員諸氏、積極的なご協力をお願いいたします。

第四回編集委員の記事

四月二十七日(土)午前一〇時三〇分～一二時、塙書房にて第四回編集委員会。福武・高山(小池委員代理)・蓮見・米地・中野各委員出席。論文原稿が出そろったので各委員の手分けして読み合せることとし、読み終った分についてはその報告がなされた。四月末日をもって研究動向欄の原稿も一切日となるので出そろってから、五月一八日午前に第五回編集委員会を開き、編集を完了した原稿全部をそろえて塙書房へ手渡すことと決定した。これによって年報第四集の刊行は、大会に先立って九月に可能となることがわかった。

共通課題に対する会員の意見

第一回研究会における島崎報告(報告要旨は研究通信60号所載)に関連して、山本陽三、島田隆の両氏からつぎのような意見がよせられています。

山 本 陽 三

「村落構造の変化に対する推進力」のなかの大きな部分は、農民自身のなかにあるというのが現在の私の心境です。心境ですから実証されてはおりません。農民組合は、この農民のなかにある推進力を引き出し組織しようとする努力しているものと思います。その限りにおいては賛成ですが、その方法については疑問があります。自分の作った米の生産価格も、生計費も知らない農民の米価斗争は信用もできないし意味もありません。

「部落の空洞化」あるいは「ムラの解体」という表現も全く賛成できません。とういった発想は、日本の農村で個別経営が普遍的だという幻想に災いされてはじめて出てくるものだと思います。アゼ草の刈り方一つで隣の田に影響のある日本の農業経営に、いわゆる個別経営など存在しないといっても、さほど乱暴な言い方ではないでしょうか。もっとも養鶏とか養豚とか施設園芸といった農地の広さで経営を判定するのではなく、投資の額で営農規模を測れるごく少数の経営はべつとして。

自立経営農家は育成といったことを言う農林省のおかしさと同じくらいに「ムラの解体」という発想は、若し農家その農業経営を中心にすえて観察すれば、理解し難い発想と思います。いわゆる社会学踏査でムラの諸制度が解体し、農民意識や生活の様式がいささかの都市化を示したからといって、それが農業経営のどこに表現されたかということが明らかにされぬ限り「ムラの解体」などという言葉は軽々しく使えたものではありません。

それは、周知のように、農家には、家計と経営という二本の柱があり、その各々を当代の政治、経済、技術といったものとの有機的な連関のもとで、より合理的に運営する「しくみ」として、農村の社会関係が自づと——ときには権力の力で——結ばれ、その諸関係が時間とともに社会制度として形成されております。とすれば社会学が、社会の諸制度や、その制度の許で形成された農民の意識や生活様式を問題としながら、その制度や意識の農民にとってもっとも重要な表現である「農業経営」という行動様式のみを除外している

ことは、どう考えてもなっとくのいかないことです。

このように考えると、若し「ムラ」が解体していれば、それはなによりもまず農家の経営のなかで発見されねばならず、「部落が空洞化」しているとすれば、それもなんらかの形で農家の経営のなかに表現されていなければなりません。もっとも、「解体」が村落構造の変貌、住民意識の変容、そして生活様式の変化という筋道で進むと仮定すれば（順序は変わるかも知れないが）その先に経営の近代化といふか変化を読みとらねば、この因果関係が円環として相互作用の関係にあるとはいえないのではないかと思います。

つまり、逆から云えば、ある部落のある農家の経営と家計の社会経済（営）学的分析から、その経営者の意識も、村落構造すらも見事に把握することもできなくはないと思われまます。

従って本年度のテーマ「村落構造の変化」というテーマも、農家の農業経営の中でも捜すという視点も重要かと思ひます。そうしてはじめて推進力の重要ファクターとして、農民意識の変化——農民の側から言えば自覚——つまり資本主義経済機構というものの理解度、実践度といった分析指標が産れてくるのではないでしようか。

これまでのいわゆる社会学的な意味での諸制度、農民意識、行動様式の変化のみをもって村落構造の変化とみなし、その「推進力」を捜すという考え方は、どうも中途半端な気がしてなりません。それは、農業経営こそ、村落構造、農民意識のもっともはっきりした可視的な表現形態であり、従ってすぐれた社会学的事実であると思ふからです。

島 田 隆

昭和四十三年度大会の「共通課題」について研究通信六〇号拝読しました。共通課題は、最低線、四十二年度の「村落構造の変化」に対する推進力をつづけてもいいと思います。ただ、その「推進力」を重視するのあまり、「村落構造の変化」という基本問題をおろそかにしないように気をつけたいものです。推進力が、商品生産であれ、政策であれ、また農民運動、あるいは指導者であれ、村落構造の変化から生れ、それをさらに変化せしめていく要因として、大きくはすべて構造変化として論究する方向をとりたいと思ひます。島崎報告を拝見しても、農民組合、農村労組の組織が農民層分解の精密な理解を必要とすること、また農民運動にとって「部落」の科学的な把握を要することが感じとられ、このことは構造的把握を精密にしないでは、推進力としての「農民運動」の研究がすすまないことを思わせるようです。とすれば、次に当然のことですが、事はすべて広い意味で歴史的变化の相のなかで考えられねばなりません。昨年、委員会で智恵をしぼられた課題に対して、新しい課題を提案する余裕は、今ありませんが、ただ前記のように、村落構造の変化を中心課題として、広く歴史的に追求できるようなテーマにしたものです。とりあえず共通課題の内容についてだけ、希望いたします。

運営委員会での議論

第二回運営委員会において、共通課題の予備的論議の促進について討議された際の話題の中で、

A「会員のうちから共通課題の論点を委員会の方でもう少ししばって明示して欲しいという要望もあった。」

B「テーマのうけ取り方はいろいろだが、そういうところから運営委員会で意見の調整を考えるということとはしない方がよい。むしろ、各人それぞれの見解にもとづいてこの問題を考えることがよいのではないか。ただこのテーマについての理解を深めるために、大会までに研究会を並行して開くことは大切だと思う。」（第一頁の研究会開催案内、第二頁の第二回、第三回両研究会計画に関する記事参照）

会員動向

○新入会員紹介

- 関 順也 京都教育大学 京都府亀岡市河原林町勝林島
- 鈴木勇次 東京教育大学大学院 東京都板橋区徳丸町四ノ三ノ五
- 藤村シヅカ 東京教育大学大学院 東京都目黒区駒場町八六二
- 国際留学生会館内

○所属変更

- 米地 実 (慶応大学法学部から日本女子大学社会福祉学科へ) .
- 阿部とし子 (北海道立保育専門学院から東京女子大学文理学部へ)
- ・中野芳彦 (新潟大学長岡分校から千葉大学教養部へ) それぞれ御転任になりました。(会員名簿の変更、訂正記事参照)

会計報告

会費入金状況は別表のとおりですが、研究通信五九号による督促と、六〇号送付のさいの振替用紙の同封の成果があつて、滞納はかなり減少してきました。また各自の納入状況のご確認のないまま送金のあるケースが多く、本年度はもとより、昭和四八年まで前納されるような事態も生れています。多額の前納には謝意を表すとともに、事務局としては未来の会費を使い込んでしまわぬよう心していただくことをお伝えします。

別表は領収書に代わるものですので十分ご確認下さい。領収月日は、現金送金の場合は事務局への到着時、振替の場合は払込受付局の日付印によっています。

| 会 費 入 金 | | | | |
|---------------------------------|-----|-------|-------|---|
| 4 3 年 2 月 3 日 ~ 4 3 年 4 月 2 5 日 | | | | |
| 月日 | 氏 名 | 金額 | 摘 要 | |
| 2. 9 | 谷鉄 | 2,600 | 4 2 年 | 度 |
| 2. 26 | 正 | 500 | 4 3 年 | 度 |
| 2. 29 | 君木 | 3,000 | 4 7 年 | 度 |
| " " | 加藤 | 1,000 | 4 3 年 | 度 |
| " " | 飯島 | 2,000 | 4 1 年 | 度 |
| " " | 中八 | 2,000 | 4 5 年 | 度 |
| 3. 1 | 清水 | 500 | 4 3 年 | 度 |
| " " | 矢野 | 2,000 | 4 5 年 | 度 |
| 3. 2 | 加村 | 1,000 | 4 3 年 | 度 |
| 3. 4 | 武島 | 1,000 | 4 1 年 | 度 |
| 3. 5 | 中速 | 1,000 | 4 3 年 | 度 |
| " " | 皆松 | 500 | 4 6 年 | 度 |
| 3. 6 | 原野 | 5,500 | 4 5 年 | 度 |
| 3. 9 | 久野 | 2,000 | 4 1 年 | 度 |
| 3. 15 | 山崎 | 2,000 | 4 3 年 | 度 |
| 3. 16 | 本内 | 500 | 4 4 年 | 度 |
| 3. 18 | 藤原 | 2,000 | 4 8 年 | 度 |
| 3. 21 | 大森 | 1,000 | 4 2 年 | 度 |
| 4. 9 | 関北 | 500 | 4 3 年 | 度 |
| 4. 10 | 藤原 | 2,000 | 4 1 年 | 度 |
| " " | 藤原 | 4,000 | 4 5 年 | 度 |
| 4. 25 | 藤原 | 1,000 | 4 4 年 | 度 |
| " " | 藤原 | 500 | 4 3 年 | 度 |

6
會員名簿の変更・訂正

研究通信六〇号以降の、所属機関、住所、住所表示の変更、訂正などを一括してかかげます。雑誌を避けるためひとつひとつ説明しませんが、お手許の名簿の当該欄をお書き換え下さい。

阿部とし子 東京女子大学文学部

小金井市東町三ノ一五五ノ一六 住吉荘

電 〇四二二一四五一四九四七

飯島源次郎 札幌市北二条東一八丁目三五四一五二

加藤 正泰 東京都文京区大塚四ノ一五ノ三

北原 龍二 柏市豊四季台一ノ一ノ一六ノ五〇六

中島 寅雄 釧路市鶴ヶ岱一八

中野 芳彦 千葉大学教養部

市川市北方町三丁目市川中山団地二ノ四〇五

森 正夫 金沢市笠舞二ノ三二ノ一

森 靖雄 大阪府立商工経済研究所

大阪府豊中市新千里北町二ノ四一

府営住宅B一ノ三〇九

米地 実 日本女子大学社会学部

松原治郎・蓮見音彦両会員共著『農村社会と構造政策』（東大出版会、一九六八年三月刊、二三三十一頁）が刊行されました。次号において書評を企画しております。

未来社刊行村落社会研究書新刊(広告)

日本農村社会学原理(上)

鈴木栄太郎著作集第一巻、三七八頁、価一八〇〇円

編集、笹森秀雄・富川盛道・藤木三千人・布施鉄治

続刊予定 第二巻、日本農村社会学原理(下)

第三巻、家族と農村社会(『農村社会学史』ほか、農村と家族に関する論文教篇)

第四巻、朝鮮社会の研究(『朝鮮農村社会踏査記』ほか、朝鮮の村落に関する論文教篇)

第五巻、都市社会学原理(全)

第六巻、社会調査法・附、国民社会学ノート(『農村社会学調査法』・社会調査野帳など)

別巻、鈴木栄太郎研究

別巻、鈴木栄太郎研究

下北の村落社会―村落体制と産業構造―

竹内利美編、五六〇頁、価二八〇〇円

執筆者、竹内利美・石崎宜雄・塚本哲人・佐々木徹郎・田原音和、江馬成也・雪江美久

村の生活組織(『村落生活―村の生活組織―』)

有賀喜左衛門著作集、第V巻、三八〇―三三三頁、一八〇〇円

(昭和初期の旧稿を昭和二三年版と対照註記)

東京都文京区小石川

一七ノ二、振替東京八七三八五番、未来社